

平和資料館・草の家の企画展（2013年1月10日～2月9日）

「高天ヶ原山の戦争 本土決戦に向けて山に陣地をつくっていた
航空兵たち」の資料

高天ヶ原山の戦争 本土決戦に向けて 山に陣地をつくっていた航空兵たち

大東亜戦争（アジア太平洋戦争）中の1945年春、高知県香美郡日章村（いまは南国市）の高知海軍航空隊の隊員たちは、機上作業練習機・白菊での特別攻撃訓練をする者、陸戦のために長岡郡篠原村明見（みょうけん。いまは南国市）、長岡郡介良村（けらむら。いまは高知市）の介良野の民家などに分宿しながら山中に陣地を構築する者などにわかれてきました。

明見、介良に派遣された明見派遣隊の中心は高知海軍航空隊の第40期飛行術偵察専修練習生たち約430でした。工作兵、主計兵もいました。伊藤平次2分隊分隊長（大尉Ⅱだいい）、岡嘉朝12分隊分隊長（中尉）、丸岡義吐22分隊分隊長（大尉）、各分隊の分隊長（兵曹長、少尉）らが指揮していました。

隊員は民家に分宿しました。そして、近くの山の中で陣地をつくりはじめました。アメリカ軍が高知県に上陸して来る、そのとき、横穴壕などに隠れながらたたかおうという構えでした。

「飛行作業をする」と、いわれて

高知海軍航空隊の第40期飛行術偵察専修練習生たちの座学は終了していましたが搭乗実習が遅れていました。

そんななかの2月末ころ、2分隊の北村昭さんたちは教員から「明日から飛行作業をするから早く起きよ」と通告されました。

このころの起床時刻は午前6時でしたが、翌朝5時半ころ、起こされました。

「駆け足」

西の裏門から出て、そのまま西に向かいました。

着いた所は明見でした。星神社に集合しました。

その時の分隊長の訓示は以下のようなものでした。

「物部川の河口が一番地形的に見て、アメリカ軍が上陸するに最適の所だ。あそこにアメリカの艦隊、揚陸艦が来る。前浜で陣地をつくって、まず、ここで防ぐ。そこがやられたら本隊もやられる。それから高知市に来る。それで、ここらの山で順に防いでいく。」

3月下旬には上海海軍航空隊の隊員たちが、ここに転任してきました。2分隊には20人から30人配属されました。

隊員は、民家に分宿しました

飛行術偵察専修練習生たちは、明見、介良野の各民家に分宿しました。

○2分隊（明見の西側）

○12分隊（介良村の介良野）

○22分隊（東の星神社の周辺）

明見には次々に施設が設定されました。

明見橋電停の南の明見橋を渡った所の左手の角には歩哨（ほしろう）が立ちました。

民家が衛兵所や本部になりました。衛兵所には、無線機をおいていました。

星神社の境内は練兵場として使われていました。

朝、ここで起床ラッパが鳴りました（起床時間は、冬午前6時、夏5時半）。

隊員たちは、明見、介良の各宿舎から走って星神社に集まりました。

そこで朝礼がありました。

上官の訓示がありました。

「最敬礼！」の号令で皇居遥拝「ようはい」をしました。

明治天皇の御製（短歌）、「あさみどり 澄みわたりたる 大空の 広きおのが 心ともがな（一点の曇りもなく、浅緑色に澄み渡った大空は、廣大無辺、見渡す限りの際涯のないものであるが、そのまま御みずからの心としたいものである）」を節つけて歌いました。

海軍体操をやりました。

2分隊の今井直重さんは、星神社で「明見派遣隊の歌」を練習したことがあるといえます。

いま残っている資料によると歌詞はつぎのようなものでした（以下、4番）。

「雲や海なる 太平洋／暗雲低く 垂れ込めて／正義の剣 振りかざし／

神州護持の 大任を／果たすは 我等明見隊」

5月27日、第40回目の海軍記念日にあたって星神社で相撲大会と演芸会が開催されました（広井一夫『甲飛十三期生 大石巖の生涯』1989年）。

鉢伏山から高天ヶ原山へ

この航空兵たちは、はじめは近くの介良村の鉢伏山（はちぶせやま。標高213・4m）で陣地をつくっていましたが（いまの潮見台ニュータウンの所です）。しかし、ここは岩が硬すぎるということで陣地づくりの場所をかえしました。

つぎに、長岡郡大津村（いまは高知市）、大篠村、介良村の高天ヶ原山（たかまがはらやま。標高107・0m）に陣地をつくりはじめました。

明見の里は、路面電車・土佐電鉄ごめん線の明見橋電停から南東に行った所です。

南に高天ヶ原山の東側部分があり、介良の里は、その山を越した所です。

高天ヶ原山のふもとは兵舎（2か所）や病舎、壕がつけられました。

中腹には横穴壕がたくさんつくられました。

尾根には一人用の戦闘壕・タコツボが掘られました。

横穴壕づくりについて2分隊の北村昭さんは「明見の東から西向けて、その後、山の中ごろから北から南向けに掘りました。介良の若宮八幡宮ほうに突きぬけてT文字型の壕になりました。そして、もう一つ横穴壕を掘りました。坑木を立て、天井には矢板を打ち付け居住区をつくりました。」と、いいます。

3月から5月ころまでは、24時間、4交替で陣地づくりをしました（5月ころには完成しました）。

トンネルを掘ったことのある兵隊たちが指導しました。

飛行術偵察専修練習生たちは穴を掘り、土を外に出しました。

横穴壕づくりは、ツルハシなどで掘り、岩にあたると、その先に穴をあけ

てダイナマイトを入れて爆破しました。

12分隊の谷合渉さんは、つぎのようにのべています。

「最初は真っ直ぐに掘り、10～15mくらいから自分たちは左方向に曲げて掘りました。まっすぐだったら、敵が来て撃ちこまれたら全滅ですから。

穴掘りの途中で堅い岩盤に出くわしたときは、岩に穴をあけて、その穴へダイナマイトを取り付け壕の外から導火線で電流をつうじて爆破しました（ダイナマイトの作業は自分がした覚えはなく、たぶん工作兵がやったと思う）。壕の作業中だったものは壕の外に出て休みました。あとで壕へ入ると硝煙のようなにおいがのこっていた。とくに、壕の側面と天井の上面の柱と板を取りつける作業は大変でした。」

夜中の作業のときは、交替で横穴壕の近くの墓のそばの広場においた上下の寝台にカヤをつつて仮眠したといっています。

22分隊第5班の上杉利則さんが、自著『七つのボタン』（南の風社。2004年）で、その陣地づくりの体験を書いています。

上杉さんの分隊は、15メートルくらいの間隔で3つの横穴壕（幅2メートルほど）を掘り、20メートルくらい掘りすすめた所で、この3つをつなぐ計画でした。

「一メートルくらい掘り進めるごとに、両側に浅い穴を掘り、松の丸太を立てます。その二本の丸太の上に、同じような丸太を渡し、カスガイでがちり固定します。次に、両側面の丸太と丸太の間に分厚い板を積み上げて板壁にしていきます。丸太を渡した天井には、これまた分厚く長い板（矢板といいました）をカケヤ「木づちの大きなもの」で隙間がないように叩き込んでいきます。」

土石の崩壊や落盤が起こらないように、横穴内は天井も側壁も板で囲まれた通路のようになっていきます。」

2分隊第10班の平野開造（かいぞう）さんたちは、真っ直ぐ約15m掘って、そこから左に曲げて掘りました。

丸太の切出しもしました

2分隊10班の平野開造さんは横穴壕掘りをしながら、2度ずつ10数日間ごと、泊まり込みで丸太の切出し作業をしたといひます。横穴壕の坑木にするためのものです。

1回目＝領石（りょうせき。いまは南国市）の山のふもとで。10数人で作業。

2回目＝秦泉寺（じんぜんじ。高知市）の山で。10数人で作業。

2分隊の利根正義さんも山の中腹で切り倒した丸太を油をぬった木のレールに木馬（きんま）に積んで降ろす作業をしたと語っています。そのときは、土佐山田の奥の国民学校に泊まり込んでの作業だったといひます。

5月10日、陣地構築用の木材切り出しに隊員三十人を引率し、高知県長岡郡久礼田村植田ムカゼ峰に行っていた大石巖二等飛行兵曹は、山腹で伐採作業を指揮監督中、切り倒された松材が一気に急斜面を落下してくるのを認め、直面する部下を突き飛ばし救助した瞬間、その木口が左大腿部に激突、気絶状態に陥りました（そのときのことの原因で、一九四六年四月十二日午後四時二十二分、死去。享年十九歳）＝広井一夫『甲飛十三期生 大石巖の生涯』。

アメリカ軍との戦闘のための横穴壕でした

高天ヶ原山のふもとに新しい木造の兵舎が建ちました。

2分隊の北村昭さんたちは民家から、ここへ移りました。

そのころ、いくつかの横穴壕が完成しました。

それは、アメリカ軍との戦闘のためのものでした。

できあがった横穴壕には段をつくって、その上に三八式歩兵銃、騎兵銃や手榴弾を入れてありました。(2分隊の北村昭さん)

いま、高天ヶ原山には

昨年11月から平和資料館・草の家のメンバー6人が高天ヶ原山に登って、調査しました。

ふもとに兵舎があった所(2か所)が、さら地になって残っています。

最初にできた東側の兵舎には、トンネルを掘ったことのある兵士たちがいたといいます。

もう一つの西側の兵舎跡には井戸や溝も残っていて、溝をたどっていたった先には薬品のビンが散らばっていました。

ふもとに壕の跡、塹壕(ざんごう)の跡がたくさん残っています。つぶれた横穴壕の一つの入口付近にはビールびんが数本埋もれていました。

中腹には横穴壕の跡がたくさん残っています。

その1つは5つに分かれていて、長さの合計は134メートルです。

もう1つは3つに分かれていて、木の枠がある水槽があります。

この2つには、壕の壁を補強していた丸太や丸太の跡が残っている所があります。約90cmごとに丸太の跡があります。

横穴壕の中にカスガイ、電線のための碍子(がいし)が落ちていました。

驚いたのは横穴壕の中にアメリカのB29が落した焼夷弾(しょういだん)の一部が落ちていたことです。

尾根には1人用の戦闘のためのタコツボの跡が残っています（22分隊の兵がつくったといえます）。

長崎山で陶器製の手榴弾づくり

1945年、明見の北側の長岡郡大津村長崎の長崎山には高知海軍航空隊の火薬庫がありました。

2分隊の北村昭さんたちが、その近くの横穴壕で陶器製の器に火薬をつめて、竹でついて手榴弾（しゅりゆうだん）をつくっていました。

陶器製の手榴弾を使っていたのは、ここだけではありません。

平和資料館・草の家に陶器製の手榴弾を展示しています。

これは高知市池の浦戸海軍航空隊の跡地から出土したものです。

震洋特別攻撃隊員を志願した11人

2分隊の北村昭さんたちは、5月1日に2等飛行兵曹（下士官）になりました。

その後、陣地づくりが一段落したころ、北村昭さんたち明見の松村薫さん宅に住んでいた11人は、震洋（しんよう）特別攻撃隊員を志願しよう思い立ちました。

高知市の御畳瀬にも基地があつたベニア板製のボートの前方に爆弾を載せて敵艦に突っ込む部隊です。

志願の「血書」を書きました。

「震洋特攻隊を志願いたします。」

最後に「散る桜、残る桜も散る桜」と書きました。

署名して、小指を切って出た血で血判をおしました。

「小指を切ったとき、母の顔を思い浮かべました」と北村さん。

松村さんの玄関前広場に11人が整列し、同じ松村宅にいた分隊士たちの出てくるのを待ちました。

最年長で代表の妹尾幸夫練習生が「お願いがあります。私たちは、震洋特攻隊を志願したいのでお願いします」といい、志願書を玉井分隊士（少尉）に渡しました。

分隊士たちは少し協議していました。

玉井分隊士が11人の前に立ち、「おれたちは、どこにいても、何をしても、ご奉公は同じである。いまの職務を忠実に果たすよう」と、たしなめました。

「これは、俺がいたただいておく」

玉井分隊士は、おしいただいて、それを胸のポケットに入れました。

陣山へ、野市へ、窪川へ

高天ヶ原山での陣地づくりの見通しがついたころ、明見派遣隊の一部は他の場所にかわっていきました。

5月、22分隊の一部は高岡郡窪川町（いまは四万十町）の設営に行きました。

22分隊10班の平野開造さんたちは、国鉄の土佐大津駅から列車に箱入りの機関銃の弾をたくさん積んで西に運びました。弾の重さのためか須崎あたりの坂を列車がなかなか登れなくて何回もスイッチバックしました。土讃線の終点・土佐久礼駅で下車。一晚、土佐久礼で泊まり、弾は翌日、トラックで窪川町宮内の高知海軍航空隊第3飛行場に運びました。すでに飛行場は

できていました。

12分隊の一部の人さんたちは介良から陣山（いまは南国市）の高知海軍航空隊の本部、送信所へ移動します。そこには、大きな坑道がありました。同隊の谷合渉さんも、そこに行きました。

22分隊第5班の上杉利則さんたちは、中腹で掘っていた3つの横穴を奥で結び合わせるといふ仕事を未完成のまま、高知海軍航空隊の飛行場の隣の物部川を隔てた香美郡野市町（いまの香美市野市町）に民家に駐留します。

ここでの上杉さんたちは、高知県に上陸するアメリカ軍の戦車を爆破する訓練をしました。

訓練の場所は、物部川の土手や草原、作物を植えていない田畑や道路でした。

棒地雷（棒の先端に爆薬を装着したもの）を持って戦車のキャタピラーの下に飛び込む。円錐弾を持って戦車によじ上り、天井の昇降口のフタを開けて投げ込む。破甲（はこう）爆雷を背中に背負って戦車の下に飛び込み、爆破させる。

「しかし、実際にはいずれの模型すらなく、手ぶらで、あるいは付近に転がっている棒切れなど持って、それらしき真似事をするにすぎませんでした。」

2分隊の一部も明見を去りました。

ヤリを持った飛行予科練習生たち

6月ころ、明見に24期乙種飛行予科練習生たち200人くらいが派遣されてきました。数えで14歳〜16歳の兵隊でした。イカリのマークがついた帽子、国防色の7つボタンの服とズボンをきて竹の筒でカバーしたヤリを

担いでいました。やり先は3つ面がある金属のもので、柄は木でした。

少年兵たちは、2つの中隊にわかれ、6月にできたばかりの木造の兵舎（井戸の残っている所。木の大きな風呂もありました）に駐屯しました。

2分隊の北村昭さん（5月1日、2等兵曹）は、班付下士官として少年兵を指導しました。この班の班長は茨木龍夫さん、もう1人の班付下士官は妹尾幸夫さんでした。

北村昭さんは、分隊士の指導でアメリカ軍の戦車に肉薄してキャタピラの下に爆弾をしかける訓練をさせたといいいます。工事に使っていたトロツコがアメリカの戦車のかわりでした。訓練の場所は、兵舎の近くの平地でした。手旗信号や無線も教えました。

アメリカ軍機の空襲下で

アメリカ軍機の空襲が激しくなっていました。

明見の民家に寝泊まりしていた22分隊10班の平野開造さんは、その家の庭先でアメリカ軍の艦上攻撃機・グラマン群の高知海軍航空隊への空襲を見えています。

「アメリカ軍の75機か80機の飛行機が急降下してダダダダダと撃つ。アメリカ軍の飛行機を撃った日本軍の2センチ2ミリの機関砲の弾の流れ弾が、庭先の私の足元にビュンビュン落ちてきました。グラマンは浦戸のほうに去っていきました。」

グラマンの同航空隊への空襲は、3月19日朝7時ころ〜午後零時ころ、5月14日、6月8日とありました。平野さんのいう空襲がいつのものだったのかはくはつきりしません。

12分隊の谷合渉さんは「壕の外に1人でいたとき、高知海軍航空隊を襲

ったグアメリカ軍の艦上攻撃機・グラマン1機が頭上を超低空で東から西の高知方面へ飛び去りました。翼の星印がハッキリ見えて、すごく口惜しかったことを覚えています。」と、いいます。

3月か5月のことだといえます。

7月4日のアメリカ軍の爆撃機・B29群の高知空襲を明見で迎えた隊員たちもいます。

明見に残っていた2分隊の約30人、北村昭さん、利根正義さんたちは高知市に向かったといえます。

「外出していた者が帰ってから、招集がかかり『いまから消しに行く』という命令が出て、高知まで走りました。菜園場(さえんば)で家に水をかけ、トビグチで家の天井をつきやぶり燃えないようにして、火を止めることができました。」(北村昭さん)

手榴弾の訓練中、頭を直撃されて…

明見派遣隊の8月1日から16日までの日々については分隊士だった森善輔さんが『痛恨の終戦』で書いています。

「8月1日

(中略) 陣地も出来上り、我が中隊本部もバラックながら完成。約10坪の室、これが私の最後の住まい。ベッド3つ、私と加藤2飛曹と従兵の3人。室のまわりはすべて実戦につかう実弾、小銃弾、機関銃弾、地雷、手榴弾。地雷ときたらヤキモノ有田焼のまことに立派なもの、(中略) 手榴弾はまああのもの、5m以内は十分に殺傷力あり、現に訓練中、22分隊において、39m離れていた見学者に信管が飛び頭を直撃され、予科練の1人が死亡し

た。私もその現場に居て医者の手当の様子を見ていたが、右こめかみに2^〇の穴があき、意識不明のまま2時間位で死亡をつぶさに見ていてかなりの衝撃をうけ、それからの訓練に必ず鉄兜をかぶらせ、事故を防ぐべく気をつけたものだった。(中略)

さらに対戦車用のロケット弾ももらった。長さ60cm、直径20cm、発火はうしろの発火点をマッチのヤスリでこするだけ。その弾を松の板、厚さ2^〇、長さ2mのもの2枚をはり合わせ、その上へのせ飛ばす。約200m飛ぶ。我々の実験では、50^〇位の松の大木をきれいにうちぬいたものだった。

米軍のM4戦車に対しどれだけの力があつたかは不明。しかし夕弾の力にはおそれいったものだった。(夕弾と言うのは弾の先がおわんのようになっているもので、爆発するとエネルギーが集中して厚い鉄板でもうちぬくものである)(中略)「

少年兵たちの初めての実弾訓練

「8月8日

「8月4日に竹やぶの中の医務室で盲腸の手術を受けたが、この日は「朝より起き上がり、サラシ2反をきりとり腹に巻き、軍刀を腰に差し、竹刀を杖に、我が中隊の陣地を巡視する。数日見なかったのに我が死場所の陣地は格段と強化されている。兵達の士気も旺盛。ゆく先々で兵達がいたわってくれる言葉もうれしい。15、16歳の若き兵達をここで死なせるかと思うと、心は安らかではないが、国のため親兄弟のため、止やむを得ぬと割り切る。その後、毎日昼も夜もなく陣地の補強と実戦訓練。気がたっているので極めて苛酷な訓練をしたものだった。(中略)

ある時は軍律違反は知っていたが(発砲禁止の命令が出ていた)、少年兵

達が銃を撃ったことがないと言うので、これでは実戦になれば烏合の衆ではないかと、中隊長思いきって実弾射撃をやることにした。大隊長に言えば怒られることは確実。中隊全員を他隊にも見つからぬようにちよつと離れた谷間に引率。各人に10発ずつ実弾を渡し、100mに的をおき、小隊長、分隊長に命じて手をとり足をとり新兵に訓練。(中略)兵達はこれで戦争が出来ずと第中隊はもえあがってしまった。あとは米軍の上陸を待つばかり。まさに士気旺盛。さあ来い、来たれの心境である。さらに指揮官としても負けてはおれぬ。200発あまりの拳銃弾をもらったので、21発だけ残し、すべて訓練に使用。それも左手に銃を持ち右手には軍刀を振り回しつつ突進するという、まさに実戦訓練。之「これ」はちよつと行きすぎか？しかしまさに自信満々。又、今までも暇さえあれば加藤正男や茨木龍雄その他を相手に剣道の実戦訓練。おかげで生傷のたえまなし。又「また」、日本刀で居合の訓練。50年経っても手に何ヶ所も傷が残る。又、山から手ごろな竹を切ってきては真向唐竹割、ななめ切り。すっかり上手になり、これ又自信満々？(中略)

さて、このころ我が中隊本部は約10坪あまりのバラックで竹やぶの中にあり、中にベッド×3と机。私と加藤十徒兵が寝ることにして周りはずべて小銃弾、機関銃弾、手榴弾、地雷等がうず高く積み上げられ、まさに火薬庫の中に寝ていることになる。今思うと身の気もよだつが、中隊長は平然たるものであった。」

「陸戦隊は之を水際にて殲滅せよ。」

「そして 8月13日

我が隊に総攻撃の命下る。『近日中に米軍の上陸は必至であると思われる。』

敵上陸を開始せば特攻隊は全機出動突入せよ。陸戦隊は之を水際にて殲滅「せんめつ」せよ。』という勇ましいものであった。そして秘密書類、その他余分なもの、さらに私物（とくに写真、手紙等）はすべて焼却せよとのこと。さあ、いよいよ最終の時が来た。13日PMから14日にかけてすべてのものを焼き尽くす。（中略）」

陛下が「頑張れ！」とおっしゃった

8月15日、天皇が終戦のラジオ放送をしました。

森善輔さんは、この放送についてつぎのように書いています。

「そして8月15日

12時より天皇陛下より重大放送があるとのこと全員集合。慎んで聞く。しかし全く意味不明。私達は13日に総攻撃の命令を受け、すでに身边も整理している。あとは戦って死ぬばかりである。よってこの放送は、陛下が勇戦奮闘せよ、しっかり戦え、頑張れ！とおっしゃったと聞いてもおかしくない。全員がそうだそうだといい出し大いに盛り上がる。エイ！エイ！オー！というわけで各人の陣地へ帰って行った。私も中隊本部に帰り、加藤と2人で一杯やりながら思い出などにひたり、加藤に対しても長いこと世話になったな、もし生き残ることがあったら再び剣を交えようと約束。でもそれは夢か？敵陣へ突入する時は決して俺の傍を離れるな。俺が死んだら俺の刀で戦ってくれ。と、戦の前に何となくしんみりとした夜となった。」

星神社に向かって「棒銃！」

8月16日午後6時過ぎ、高知海軍航空隊から「土佐湾沖に敵機動部隊見

ゆ。総員特攻用意」の指示が出ました。

森善輔さんも、この日のことを書いています。

「8月16日

今日も兵達は張り切っている。中隊長も張り切っている。隊全体がピーンと今にも弦を離れんばかりの矢の感じである。すでに実弾100発も手榴弾も2発渡してある。ロケット弾と地雷数百は私が管理して、米軍が上陸したら陣前に埋めることとする。本日敵機の来襲もなく不気味な静けさ。まさに嵐の前の静けさとはこうゆうことか！その夜半、その静けさは突如破られた。武装のまま仮眠していた私は飛び起きた。南東の海岸の空が赤々と燃え上がっている。そして激しい爆発の音がかすかながら伝わってくる。さあいよいよ米軍の上陸だ！夜明けの冷気か思わず武者地震いが起こる。ぐっと気を落ち着けて加藤に非常呼集を命ぜさせる。しかしその頃は各小隊長（14期の少尉）4人と各分隊長も集まってくる。

命令

『いよいよ来たぞ。各小隊長は隊をまとめて、すみやかに星神社の広場に集合せよ！』

やがて夜は白々と明けた。星神社の広場には完全武装の兵達がぞくぞくと集合してくる。いずれも15、6歳の少年兵が主力である。いずれもマナシ顔は引きつっている。無理もない。

その時の中隊の編成（2002年現在も、中隊名簿は私がついている。）

1ヶ分隊10人、小銃4、槍5、7ミリ7機関銃1

4ヶ分隊で、1ヶ小隊+小隊長1 計41名

4ヶ小隊で、中隊 計164名

+中隊本部 32名

(ロケット、地雷担当その他伝令) 37名

十士官 森中尉以下 5名

計201名

以上 明見 伊藤大隊 第2中隊 森中隊

伊藤大隊第1中隊は遠藤中尉201名

その他 大隊本部付星野中尉以下20名余

以上 420名

中隊の整列した様子は正に異様なものであった。半分は小銃、半分は槍と来た付剣を命じたら、少年兵であるため剣先は頭より高く朝日に輝いてキラキラと勇ましいと言うか、あまりに中世的なヤクザの集団みたいでちよつとにやりとする。

星神社に向かい棒銃！苦しい時の神だのみと言うわけ。その後、森中隊長は咆えた。『最後の戦闘に中隊長は真っ先に突撃する。ついて来れるヤツはついて来い！なお、生き残ったものは高知の山々に立て籠りゲリラとなって戦え。以上。』『あとは時が来るまでゆっくりと休め！』隊員は肅々と配置について行った。しかしAMいたずらに時間は過ぎて行った。敵機も飛ばず物音もない。疑心暗鬼とかぎりない不安につつまれながらじっと待つ。兵も各小隊長が次々にやってくる。中隊長としては「だまって待てという外はない。PM何時頃かジリジリと待つ私のもとに大隊長より命あり。『敵上陸は誤報なり。東南の水上特攻基地が大爆発。今だ炎上中。部隊はそのまま待機せよ。』何たることか！（後略）」